

解題 把握しがたいものとして都市を記述すること ——関係論的地理学における空間・時間と言説の関係性について——

林 凌

Ryo HAYASHI

Describing the City as Elusive Things:

Relationships between Space-Time and Discourses in Relational Geography.

現代の都市研究者は、都市を本質的に認識可能な対象として捉えるかそうでないかで分けることができる。前者の研究者にとって、都市とは私たちにとって予測可能な論理が生じる場所である。その論理はエドワード・グレイザーにとっては資本主義市場であり、アラン・スコットやマイケル・ストーパーにとっては集合作用(agglomeration)であり、リチャード・フロリダにとっては知識の拡散(spillover)であった。こうした見方を取るのならば、都市は神秘ではない。それは説明可能なものなのだ。一方、後者の研究者にとって、都市という空間スケールは把握し難く、その空間内におけるアクターの相互的出会いの中で、何が生じているのかは推し量ることしか出来ない。どのような結果が生じるにせよ、それは常に移ろう関係の非決定的な配列によるのである。アブドゥ・マリク・シモン、アナンヤ・ロイ、スティーブ・パイル、アッシュ・アミン、そしてナイジェル・スリフトにとって、「都市とは、部分的に、一時的に、そして経験的にしか知りうるることができないものなのだ(Amin and Thrift, 2016: 27)」。(Beauregard, 2018: 938)

問題意識——本論文の位置づけ

英米圏における都市研究の系譜が、それ自体複雑的であり、また分野横断的なものであることは論を俟たない。空間に関する論考の多くが理論・実証双方において地理学を中心になされてきた日本と異なり——より正確に言うのならば空間に関する論考を様々な領域で別個かつ独立に進めてきたという方が正しいと思われるが——、英米圏、特にイギリスにおいては地理学、社会学、カルチュラル・スタディーズにまたがる形で、多くの都市研究が進められてきた。このことは実り多い豊かな知見を都市研究にもたらしたといえる。上記の引用にあるように、都市

をただちに認識できる対象ではなく、様々なアクターの織りなす永続的な関係性の記述を通してのみ推し量ることのできるものである、と考える研究の多くは、まさにこうした分野横断的研究の中から生まれてきたものだからである。これら一連の研究を理解することは、どちらかといえば都市を実態として捉える見方が支配的な斯学の都市研究に、異なる見方を提供するということから、価値あるものといえる。

一方で私たち受容者としての観点から見た場合、そうした学的知見の構成の系譜は、認識の困難さを生み出す元凶ともなっている。言い換えるのならば、日本においては地理学、社会学、カルチュラル・スタディーズがそれぞれ独自固有の領域として立ち上がってきたことから、これらの境界領域における知見を十分に把握することが出来ていないという問題があるのである。つまり、社会学ではアンソニー・ギデンズに代表される理論社会学のみが着目される傾向にあり、地理学では実証研究が批判地理学の系譜にある研究のみが着目される傾向にあり、カルチュラル・スタディーズではスチュアート・ホール等の批判的文化研究の系譜にある研究のみが着目される傾向にある、といった具合である。

その結果、1980年代以降現れ、1990年代から2000年代に渡って多くの理論的知見をもたらしたイギリスの現代産業社会論-都市研究の系譜は、日本においてはこれら学問領域の折り重なる、ちょうど盲点の部位に存在していたがゆえに、包括的な理解が進んでいない。言い換えるのならば、私たちは本来であれば統一した流れとして理解すべきはずの1980年代以降のイギリス社会学および地理学を各々独立した領域としてみなし、そして訳してきたがゆえに、これらの中で培われてきた交流を殆ど捉え逃してきたのである。その結果私たちは、冒頭に上げた引用

部の、「現代都市研究者を、都市を本質的に認識可能な対象として捉えるかそうでないかで分けることができる」という区分そのものすら、十分に理解することが出来ていないのではないのか。あるいは私達は、なぜ2000年代の同時期に地理学においてマッシーが、社会学においてアーリが、「異種混濁性」をめぐる類似の空間-社会理論に双方ともたどり着いたのかも、理解できていないのではないのか (Massey, 2005=2014: 27-34; Urry, 2007=2015: 47-60)。

20年前に書かれたナイジェル・スリフトの論文を今訳す必要は、こうした問題を解決するためにある。すなわち本論文は、現在ようやく翻訳が進みつつある一連の諸研究を理解するにあたって重要な位置を占めており、かつスリフト自身もこうしたネットワークの中で自らの研究を培ってきたと考えることができるがゆえに、学説史的に重要な位置を占めているのである。例えば、2014年に訳出されたドリーン・マッシーの『空間のために』では、本論文が「科学への信頼？」という節を設けられた上で、幾度にも渡って引用されている。マッシーによれば、1990年代から2000年代にかけての複雑性理論のブームと、空間の重要性の再評価がリンクしたものであるというスリフトの主張は検討に値するものであり、ゆえに彼女がその後考察する〈空間-時間〉をめぐる関係論的理解のエビデンスの一つとして、本論文が示されるのである (Massey, 2005=2014: 242-249)。

また、ジョン・アーリは2000年代以降彼が進めた複雑性科学の語彙を援用した自らの研究において、本論文を重要な先行研究として扱っており、その多くを負っていることを示している (Urry, 2003=2014, 2007=2015)。このことから、本論文がイギリス都市研究・産業社会論におけるアクターネットワーク理論、あるいはフランス現代思想に依拠した関係論的な記述の可能性を切り開いた論文の端緒であるとみなすことは妥当であると言える。事実他にも、2017年度の *Progress in Human Geography* の最優秀論文に選ばれたキー・マクファーレン (2017) の "A thousand CEOs: Relational thought, processual space, and Deleuzian ontology in human geography and strategic management" (「千のCEO：人文地理学と経営管理論における関係論的思考、手続き的空間、ドゥルーズ存在論」) が、本論文の批判的再解釈を基軸に持論を展開しているなど、本論文は後続の研究者に今なお大きな影響を与えていると言えるのである。

また地理学、社会学、カルチュラル・スタディーズを横断する形で自らの研究キャリアを積み上げた、イギリス都市研究における重要な研究者の一人

である彼の研究史を概観するにあたって、本論文は重要であると考えられる。ナイジェル・スリフトの代表作といえば彼が2007年に著した——といっても彼の他の本と同様に、この本も採録済み論文集なのだが—— "Non-Representational Theory: Space, Politics, Affect", 2007 (『非表象理論』) であり、本理論の概略は日本においても紹介がされてきた (泉谷, 2001)。だが一方で、本理論はそのぎょっと目を引くような名前のキャッチーさ——地図に事物を表象させることをアイデンティティとしてきた地理学者にとって、表象し得ないものを扱うという挑発的宣言は、良かれ悪しかれ興味を引くものである——と裏腹に、それまでスリフトが積み重ねてきた諸研究、すなわち彼の出世作である "Spatial Formations", 1996 (『空間の編成』) において既に示されていたような時間地理学、アクターネットワーク理論やフランス現代思想の受容、あるいは本論文や本論文が収録された論文集である "Knowing Capitalism", 2005 (『資本主義を知る』) においても頻出する、「資本主義の文化的循環」に関する諸論考を土台としてきたことは、十分に示されてこなかった。いうなれば彼の思弁的議論がどのような思想的背景や、実証研究をもとに行われたものだったのかは、紹介がなされてこなかったのであり、その意味において「非表象理論」の前段とも言えるこの時期のスリフトの研究を理解することは、彼の学問的影響を精査する上で、重要な作業であると言えるのである。

論文紹介——本論文の解釈余地

さて、それでは本論文の内容の紹介に入りたい。本論文はカルチュラル・スタディーズの専門誌である *Theory, Culture, Society* に1999年に掲載されたものである。日本でも周知の通り、当時の欧米圏においてはいわゆるポストモダン思想が非常に活発に展開され、地理学・社会学・歴史学・人類学など人文社会科学にも言語論的転回の影響が広く見られるようになっていた一方で、ソーカル事件に代表される、サイエンスウォーズのショックが色濃い時期でもあった。本論文もそうした時代情勢を強く反映しており、様々な領域における当時最新の知見を反映させることを試みつつも、しばしばサイエンスウォーズに目配せをしながら、複雑系科学をめぐる言説を分析するテキストとなっている。事実、彼はここで明確に自らの研究を地理学であると呼称している一方で、フランス現代思想 (ミシェル・セール、ジル・

ドゥルーズ、ジャック・デリダ)、社会学・人類学(ブルノ・ラトゥール、マーヴィン・ストラザン)や文学理論(ジリアン・ピア、ゲイリー・ソール・モーソン)などの研究から多くの引用を行っている。学説史的観点、あるいは地理思想史的観点からすれば、こうしたリファレンスの形態そのものがまずは着目されよう。

また、彼の論の運びも(一般的な都市研究の論文と比べ)非常に独特である。まず彼は地理学というディシプリンが本質的に空間の複雑性をどのように縮減するかというものであったことを最初に論じ、そこから当時「流行」していた複雑性理論と地理学の間のつながりを復活させることを宣言する。だが、これは多くの実証的地理学者が想像するような、複雑性理論が編み出したアイデアや数式を地理学へ応用することを目指すものではない。逆にそこで目指されるのは、複雑性理論が編み出したアイデアの普及過程そのものを、地理学的課題として拾い上げようとするのである。事実彼はその後、アクターネットワーク理論に依拠する形で、サイエンス、ビジネス、ニューエイジという3つのネットワークが、複雑性をめぐるメタファーを空間的な広がりの中で生み出し、頒布し、循環させていく過程を、執拗的なまでに種々の言説を題材として描き出す。彼によれば、複雑性をめぐるメタファーはサイエンスが独自に保持するものではなく、ビジネス・ニューエイジのネットワークの中にも入り込み、意味自体を変容させながら西欧社会の中を駆け巡るようになっているのである。

そして彼は、この一見地理学のそれとかけ離れているように思える作業の結果、地理学的課題として以下の4点を導き出している。すなわち、どこで特定の知識-言説は生産されているのか、知識-言説の生産過程において空間的想像力はどのような影響を与えているのか、知識-言説の生産過程に組み込まれた人々の対面的相互作用がどのように生じているのか、そしてメタファーの生産過程において空間はどのような影響を与えているのか、である。つまり、ここでは言説の内容ではなく、言説の持つ性質・背景・文脈が、アクターネットワーク理論の見地から、地理学的課題として問題化されているのである。

この点を踏まえるのならば、本稿は「複雑性」をめぐるメタファーの普及を題材としたアクターネットワーク理論の実証研究としても読める——こうした科学者の実践は今なお再生産され続けており(落合, 2018)、今なお現代的意義があるとも言える——と同時に、そこから都市研究における新たな領域の提

示——「資本主義の文化的循環」に代表される、言説-知識の組成過程における空間の役割——を行おうとした研究の代表例としても読むことができる。かつてティム・クレスウェルが指摘したように、「言説は特定の場所の中で生産される(Cresswell, 2013: 213)」以上、場所のイメージ、あるいは空間に起因する相互作用の制約は、言説の圏域やその経路の方向付けにおいて重要な役割を果たすのであり、だからこそ空間と直接関係しない言説や知識のフローであったとしても、それは地理学の対象となりうる。その意味において本稿は、アクターネットワーク理論と都市研究の接合点、あるいは言説分析と都市研究の接合点を、示しているのである。

だが、こうした作業は、本論文の前半部に過ぎない。本稿において地理思想史的に注目されべきであり、かつより(術学的なほど)難解なのは、「複雑性の時間」と題された後半部である。ここで彼が種々のテキストを引用しながら論じるのは、以下のことである。まず、こうした複雑性理論に関するメタファーの広い流布は、近年の西欧社会の変化なしにはなしえないものであった。だが同時にこうしたメタファーの流布は、結果として人々の実践を支える規範そのものにも作用していくものでもある。そしてその作用とは、単一の人格像、人間中心主義、単線的時空間像の放棄を迫るものにほかならない。つまり複雑性理論のメタファーの普及は、西欧社会におけるモダニティの解体の一助をなしていると同時に、そうした解体を表象するムーブメントでもあるのだというのが、(留保付きとはいえ)スリフトの後半部における主張なのであった。

この一見突拍子もなく、かつ難解な後半部の議論を理解するためには、同時代のマッシーの「進歩的な場所感覚」(1993=2002: 32-43)をめぐる議論、そして当時の英米圏の地理学界における研究対象を巡る素朴実在論的パースペクティブの喪失(泉谷, 2003)を踏まえる必要がある。つまり、ここで彼がフランス現代思想や文学理論、ポストモダン人類学に依拠する形で論じようとしているのは、空間や時間を考えるにあたって、もはやそれを単一のスケールのもとに解釈する事はできないということ、複雑性理論のメタファーの普及に現れているように、少なくとも西欧社会においては市井のレベルでそうした物の考え方が失われつつあるということ、なのである。当然のことながら、こうした議論が地理学という装いを呈して語られるのは、(少なくとも当時)地理学において空間や時間を考えるにあたってそれを単一のスケールとして捉える見方が支配的で

あり、にもかかわらずそうした見方を続けることが困難となっていたからに他ならない。つまり、スリフトによる本論文における後半部の議論は、前半部の議論をエビデンスとする形で提示される、一種の研究マニフェストなのである。ここで主張されているのは、マッシーがハーヴェイに対して突きつけた「進歩的な場所感覚」——「場所は境界線のある領域としてではなく、社会的諸関係と理解のネットワークにおいて接合された契機として想像できる」(Massey, 1993=2002: 41) ——と裏表の関係にある、複数性と関係性によってかうじて定義される「進歩的な時間感覚」を捉えることの重要性なのだ。

もちろん、スリフトのこの議論は、本論文に限定するのであれば片手落ちである。なぜならば、本論文にてスリフトはこうした「進歩的な時間感覚」を踏まえた、具体的な研究プログラムを提示できていないからである。だが『資本主義を知ること』において彼がコンピュータソフトウェア、決済システムといったテーマについて論じていること、あるいは『非表象理論』において自動車によるドライブ経験を論じていることなどを踏まえるのならば (Thrift, 2005; 2007)、彼の提示した論点はその後果たされたと見てよいだろう。というのも、こうしたテクノロジーの分析を通じて彼が論じているのは、共在しながらも異なる多種多様な時間感覚が、多種多様なモノを介して現在の私たちの社会生活の中に埋め込まれていることを主張するものだからである。再び『空間のために』を引用するのであれば、私たちは「<空間-時間>を作り続けながら……都市を数知れぬほど多くの仕方で実践」(Massey, 2005=2014: 281) しているのであり、この観点よりスリフトの一連の著作群は、『空間的編成』から『非表象理論』に至るまで、まさにそうした実践の形式を記述しようとする試みとして読むことができるのである。

関係論的地理学を実証研究に埋め込む ——本論文の知見の応用可能性とその方向

前節では本論文の位置づけと、スリフトの業績の学説史上の位置づけについて概観するとともに、前半部、後半部それぞれにおけるスリフトの主張について論じた。ではこの解釈が正しいとして、私たちはいかなる形でこうした議論の視座を自らの研究に取り入れることができるのか。上記した2つの主張に沿う形でその方向性に触れることとしたい。

第一の方向性は、特定の言説の系譜における空

間・場所の重要性を指摘することである。先述したように、日本において極めて盛んに言説分析に属する研究が社会学、あるいはカルチュラル・スタディーズにおいて展開されてきたにもかかわらず、そこに空間や場所の影響を見出そうとした研究は数少ない(数少ない事例として 仙波, 2016参照)。より正確に言うのならば、ある特定の言説が特定の空間を適切に表象していると捉える(言説上の空間像の変容はその空間の変容であると「みなす」)研究は多く存在する一方で、言説の形式そのものに特定の空間・場所をめぐる想像力やその性質が与えた影響を論じた研究は——少なくともその性質を意識した研究は——決して多くないのが現状なのである。

だが本論文にてスリフトが示したように、特定の言説の生産の系譜をたどるならば、その言説が生産される場所、あるいはその言説が依拠する空間的想像力の影響は言説のどこかしらに認めることができるものである。であるならば私たちは、空間と言説の絶え間ない構成過程を論じるにあたって、**特定の空間・場所に関する言説に関する研究**だけでなく、**特定の言説に対する空間・場所の影響に関する研究**についても行う必要があるのではないだろうか。言い換えるのならば私たちは空間と言説を特定の因果関係の中で捉え、分析するのではなく、人々の実践の中で空間と言説双方が相補的な形で生産されていくものとしてみなし、分析していく必要があるのである。

第二の方向性は、まさにこうした「進歩的な場所感覚—時間感覚」が生じ、消え、変転していくプロセスを、具体的な実践の形式に沿う形で記述することである。ここで、近年のメディア論の潮流が参考になる。いわゆる物質論的転回の後、メディア論においても海外を中心に、メッセージの内容ではなくメッセージの伝達の形式が問題視されるようになった。ジョナサン・クレリー (1992=2005)、ジョナサン・スターン (2003=2015)、ニック・クドリ (2012=2018) などを代表的論者とする近年のメディア研究は、「聞くこと」や「見ること」そのものの社会的、技術的条件を探求するようになったのである。つまり実践の内容ではなく実践の形式が、メディア論においても問題化されるようになったのだ。

よって私たちは、こうしたメディア論の知見と上記したスリフト・マッシーの提示した知見を総合して、以下のことを考えることができる。すなわち、私たちはこうしたメディアの形式の変化の中で、どのような形で独自の場所感覚・時間感覚を育むようになったのであろうか。そしてそのような感覚は、

メディアの再帰的な形式変容においてどのような影響を及ぼしているのだろうか。たとえば私たちの場所感覚と、地理情報をめぐるフォーマット（地理情報標準プロファイルなど）・書き込み装置（GPSデバイスなど）・地理情報サービス（グーグルマップなど）は、どのような形で相補的に構成されてきたのだろうか。こうしたテーマを、1990年代以降勃興し、近年メディア論と急速に接近しつつある情報の地理学の知見（Kinsley, 2014）などを手がかりに、考えることが求められているのである。

以上、本論文の内容と、その理解可能性を論じた。総じてスリフトの議論は、徹頭徹尾反本質主義的立場から都市、あるいは空間を論じようとするものであった。なぜならば都市や空間を構成する関係性からなるネットワーク——アクターネットワーク理論におけるネットワークは、実のところ蜘蛛の巣や下水管網のように固定して実在するものではなく、人々の実践の中で現れ、瞬時に消えゆくものである（Latour, 2005=2019: 270-275）——や、人々の場所感覚・時間感覚は常に移ろうものであり、また地図上に正確に表象し得るものではないものだからである。重要なのはそうした不正確性を科学に反するものとして排除したり、研究者の目線でもって無理に秩序化させたりする——これは研究者の目線から見て真実を表しているが、それは真実ではない、などの理由で言説や空間的表象を縮減する——のではなく、人々の実践に付随するそうした不正確性そのものを記述し、それがどのような場面においてたち現れるのかを論じることにはかならない。その意味において私たち都市研究者は、「都市とは、部分的に、一時的に、そして経験的にしか知りうるができないものなのだ（Amin and Thrift, 2016: 27）」というアミンとスリフトの言明を、今一度再考する必要があるのである。

謝辞

本論文ならびに解題は、公益財団法人村田学術振興財団研究助成「ポスト・アーバンリズム理論の構築——21世紀の複合的都市研究のために」（研究代表者：平田周）、公益財団法人松下幸之助記念財団「近現代日本における経済主体の実体化過程とその社会的背景の解明——「消費者」概念に着目して」（研究代表者：林 凌）の研究成果の一部である。本解題の作成にあたっては、Reading Circle of Urban and Regional Studiesの皆様に貴重なコメントをいただいた。また、文献目録作成にあたっては、東京大学大学院の中川雄大氏に多大なるご助力を頂いた。合わせてこうした支援に感謝の意を捧げたい。

また本論文の翻訳を快く許可して下さったナイジェル・スリフト氏に、この場をかりて謝意を表明したい。

文献

- アーリ, J. 著, 吉原直樹監訳 2014. 『グローバルな複雑性』法政大学出版局. Urry, J. 2003. *Global Complexity*, Cambridge: Polity
- . 2015. 『モビリティーズ——移動の社会学』作品社. ———. 2007. *Mobilities*, Cambridge: Polity
- 泉谷洋一 2001. 地理的スケールの「非表象理論」的再構成——または（行為遂行的）／（パフォーマンスティブ）な「場所」論. 日本地理学会発表要旨集59: 19
- . 2003. 人文地理学におけるポストモダニズムと批判的実在論—英語圏における理論的論争をめぐって—空間・社会・地理思想 8: 2-22.
- 落合陽一 2018. 『デジタルネイチャー 生態系を為す汎神化した計算機による侘と寂』PLANETS.
- クドリー, N. 著, 山腰修三監訳 2018. 『メディア・社会・世界——デジタルメディアと社会理論』慶應義塾大学出版局.
- Couldry, N. 2012. *Media, Society, World: Social Theory and Digital Media Practice*, Cambridge: Polity Press.
- クレーリー, J. 著 遠藤知巳訳 2005. 『観察者の系譜——視覚空間の変容とモダニティ』以文社. Cray, J. 1992. *Techniques of the Observer on Vision and Modernity in the Nineteenth Century*, MIT Press.
- スターン, J. 著 中川克志, 金子智太郎, 谷口文和訳 2015. 『聞こえ来る過去——音響再生産の文化的起源』インスクリプト. Sterne, J. 2003. *The Audible Past: Cultural Origins of Sound Reproduction*, Duke University Press.
- 仙波希望 2016. 「平和都市」の「原爆スラム」——戦後広島復興期における相生通りの生成と消滅に着目して. 日本都市社会学学会年報34: 124-142.
- マッシー, D. 著, 加藤政洋訳 2002. 権力の幾何学と進歩的な場所感覚: グローバル/ローカルな空間の論理. 思想 933: 32-44.
- Massey, D. 1993. Power-Geometry and a Progressive Sense of Place. In Bird, J. Curtis, B. Putnam, T. Robertson, G and Tickner, L., editors, *Mapping the Future*, Routledge, 59-69.
- . 森正人・伊澤高志訳 2014. 『空間のために』月曜社. ———. 2005. *For Space*, London: SAGE.
- ラトゥール, B. 著, 伊藤嘉高訳 2019. 『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク入門』法政大学出版局. Latour, B. *Reassembling the Social: An Introduction of Actor-network-theory*. Oxford University Press.
- Amin, A and Thrift, N. 2016. *Seeing Like a City*, Polity Press.
- Beaugard, R. 2018. Book review: Seeing Like a City. *Urban Studies*, 55(4), 938-940.
- Cresswell, T. 2013. *Geographic Thought: A Critical Introduction*, Wiley-Blackwell.
- MacFarlane, K. 2017. A thousand CEOs: Relational thought, pro-

- cessual space, and Deleuzian ontology in human geography and strategic management. *Progress in Human Geography*, 41(3), 299-320.
- Kinsley, S. 2014. The Matter of 'Virtual' Geographies, *Progress in human Geography*, 38(3) 364-384
- Thrift, N. 1996. *Spatial Formations*, London: SAGE.
- . 1999. The Place of Complexity. *Theory, Culture & Society*, 16(3), 31-69.
- . 2005. *Knowing Capitalism*, London: SAGE.
- . 2007. *Non-Representational Theory: Space, Politics, Affect*, London: SAGE.